

# 落語を取り入れた授業と その後に見られたインタラクティブな関係性の広がり ー授業者の視点からの気づきを通してー

Exploring the interactive relationships created between teacher and students using Rakugo(traditional comic storytelling):

From the viewpoint of the teacher

小田 雄 仁\* 東海林 麗 香\*\*  
ODA Takehito SHOJI Reika

**要約**：高校現場において、学習内容を取り入れた落語を授業者が創作し実演するという取り組みを実施してから、前のめりに授業に取り組む生徒の様子がみられたり、分からない内容を質問に来たり、提示した以上に課題を丁寧に取り組む生徒がみられたりと生徒が学習に積極的に取り組む様子がいくつもみられた。また、学習以外でも、生徒からさまざまな相談を受けたり、保護者を交えた懇談でも今まで以上に関係がうまく築けたりした。これら、落語教授法を実践した後に見られた変容について、前年度のアンケート結果（小田，2015）も参考にしながら、フィールドメモをもとに考察した。授業者が自ら落語を実演することが自己開示と類似した作用となり、生徒とのインタラクティブな関係性の構築につながったと考えられる。さらに、そのような関係性によってみられるようになった変容は、教師に多くの利益をもたらすことが推測された。また、この経験を通して授業者自身にもいくつかの変容がみられ、それについても考察をした。

**キーワード**：高校，生物，落語，インタラクティブな関係性

## I 問題

筆者は40歳手前の公立高校の教師であるが、数年前から生徒と信頼関係の構築が以前ほどうまくいかないと感じたり授業で以前ほど生徒を惹きつけられていないと感じたりする場面がみられるようになった。若くて経験も浅かった頃の方が上手く授業ができていたのかもしれないと感じるようになった。このような経験は学校現場ではよく聞かれる話であり、姫野(2015)は行き詰まりを感じている教師を「学びが閉じられる」と表現し、その下位構造として「課題意識が薄い」「指示待ち」「こなせてしまう」「自分の世界に固執」の4点をあげている。そして、教師の学びが「開かれる」「閉じられる」のどちら寄りになるかの鍵は「子どもの変容に手ごたえを感じられるか」と述べている。筆者の周りにも、生徒の様々な相談にのったり、授業で惹きつけたりするなど、まさにベテランと呼ぶにふさわしい教師がいるが、そのようなベテラン教師は生徒との信頼関係が確立されているためか、微細な変容にも気づけるといふ印象を受ける。また、上條(2005)は、生徒との関係性の構築のためにユーモアの果たす役割の重要性を述べているが、先に述べたベテラン教師もユーモアに富むものが多い。ユーモアに富むからこそ生徒と十分な信頼関係が築け、信頼関係があるからこそ、微細な変容にも手ごたえを感じ、それをもとに生徒の実情に即した授業改善をすることが

\* 山梨県立甲府東高等学校 \*\* 教育実践創成講座

できる。それによって生徒の学習意欲を引き出したり、学力向上や教育相談の充実にもつなげられたりもする。そして、これらの充実は生徒との信頼関係をさらに深めることに繋がる。このような正の相互作用が筆者の周りのベテラン教師には散見される。

このような経験から私は、教師と生徒の信頼関係の構築が、学習意欲や学力向上に関連していて、しかもそれは、授業をするための前提条件の1つのようなものではなく、むしろ学習意欲や学力向上の核心に近いという印象をもっている。その印象をてがかりに、授業にユーモアを積極的に取り入れる取り組みを、具体的には授業に落語を取り入れる取り組み「落語教授法」を2014年度から実践している。そして、その取り組みを通して、それまで感じていた行き詰まりが霧散していくような体験をしている。本研究では、筆者が「落語教授法」を取り入れた後にみられた変化の考察を通して、教師の授業や教育相談等の充実のための手がかりを考える契機を提供することを目的とする。

私が、日々の授業で実践している「落語教授法」は、授業に関連した落語を授業者が自作し実演するというものであり、落語というユーモアの要素を取り入れることで、リフレッシュ効果や、雑談の要素があるために松原（2005）が述べるようなポジティブな影響、さらには学習内容とも関連があるために知的好奇心も刺激する等の複数の効果が期待される。授業内で実施する落語を「創作授業中落語」と呼び、その授業時間の通常授業と合わせ1時間のパッケージとしたものを「落語教授法」と定義した。また、「創作授業中落語」の定義は以下の**定義1～3**とした。

**定義1** 落語であること（最後にオチを持つ物語を、教師1人で語る。）

**定義2** 5分程度であること（授業本題の時間もあるので、それほど多くの時間を割けない。また、長すぎると実施者の負担が大きくなる。）

**定義3** 授業内容に関連があること

「創作授業中落語」の一例（概要）を示す。この授業の学習内容は免疫記憶細胞の2次応答に関するものであり、授業開始直後に「創作授業中落語」を実施した。内容は、免疫を治療に応用した事例としてのハブに咬まれた場合の血清の作成方法や効果等で2次応答のメカニズムの概略に触れたものである。

（マクラ）沖縄には様々な見どころがありますが、毒蛇のハブには気をつけてください（注：2年生が修学旅行に行く時期に実施した）。（本題）修学旅行から帰ってきた弟は、姉に沖縄で担任の教師がハブにかまれて大変だったと、その時の状況や、ヘビを取ってくれという教師に対して写真を撮るのかと勘違いして怒られてしまったことなどを伝える。（沖縄の場面になる）ヘビに襲われた時、助けようとしなかったことを怒る教師をなだめようと、弟は教師に代わって保健所に電話をかける。その電話の中で、血清の作成方法や効果等について話すか、電話が長すぎたために、教師は毒が回って気を失ってしまう。結局、弟がタクシーで教師を病院に運び、事なきを得た。教師は、搬送先の病院で意気投合した看護師とお付き合いすることになる。（オチ）ハブに噛まれたことが縁で、お付き合いの相手ができ、教師にとっても良い日が来そうだね、Have（ハブ）a nice day. と姉が言う。

なお、以後の「創作授業中落語」はすべて落語と表記する。先行研究については、教育現場における笑いの活用や効果についての研究は多くされているが、落語に限定すると、授業中に落語を見て伝統文化や歴史、歴史的表現を学ぶという論文が散見される程度であり、授業者が授業内容を盛り込んだ落語を行う研究は、今のところ見つけられていない。

落語教授法は、単に落語を聞いて学ぶというものではない。落語を理解するためには、その前段階にある説明で、生物用語を正確に理解している必要があるし、落語の中の不全感は、その後の補足説明で解消されるなど、落語があることで、授業内の各パーツが有機的に結び付けられることを狙っている。また、落語をすることで、授業の中にメリハリをつける、意欲を喚起する、リフレッシュさせる等の効果も期待している。授業者は落語を核にして、授業の展開を考える必要があり、落語

の部分だけ取り出して落語教授法の効果を語ることはできないのである。

2014年はC高校において効果的な落語教授法のあり方について質問紙とフィールドメモをもとに研究し（小田，2014），2015年はB高校の生徒が落語教授法をどのように受け止めているかについてフィールドメモとアンケート結果をもとに研究したが（小田，2015），本研究は，それらの研究に継続するものである。

## II 研究

本研究では，2015年度の落語教授法を通して関わった1年生の一部と2016年度の授業でも関わることができたために，彼らの1年次から2年次10月までの関わりを通して気づいたこと，および2016年度の1年生との落語教授法を通しての関わりで気づいたことの考察である。

### 1 対象および期間

- (1) 対象校：A県内公立B高等学校
- (2) 対象期間：2015年4月～2016年10月（継続中）

### 2 研究方法

#### (1) 対象生徒および実施科目

表1にある通り，2015年度に教科担任として関わった生徒の一部の授業を2016年度も担当することができた。また，2016年度は2015年度ほどは落語教授法を実践できていない。

表1 対象生徒および対象科目

2015年度		2016年度
1年生240名（6クラス） 生物基礎（13回）	－進級→	2年生26名（理系生物選択2クラス） 生物（2回）
		1年生200名（5クラス） 生物基礎（5回）

（ ）の中の回数は2016年10月末までの落語教授法の実施回数である。

#### (2) アンケート

2015年度は6月，9月，11月の定期試験時にテストの解答用紙にアンケート欄を設け，その結果をカテゴリ分類して分析をした（小田，2015）。本研究では小田（2015）に記載されている9月のアンケート結果を引用する。なお，そのアンケートの質問文は，「時間に余裕がありましたら以下のアンケートを書いてください。筆者の授業では，今年度，落語を取り入れています。落語を取り入れることで授業・学習全般に何か変化を感じるようなことはありますか。もしありましたら，できるだけ具体的に教えてください。浮かばない場合は，落語の効果や感想（肯定・否定）でも構いません。」である。

#### (3) フィールドメモ

授業の内外で，私自身が感じたこと，および参観者等から言われたことで，落語教授法に関わる事柄をノートに記録したものである。

### Ⅲ 結果と考察

落語教授法を実践した時間内に生徒にみられた変化，授業以外で生徒に見られた変化，授業者自身に起きた変化など，さまざまな変化がみられたが，落語教授法を導入した後に生徒・授業にみられた変化を「Ⅲ 結果と考察」で記載し，授業者自身に現れた変化は，「Ⅳ 総合考察」に記載する。

#### 1 授業のなかの笑いの質の変化

落語をすると笑いが起こる。笑いが起こることは，落語だから当たり前と思われるかもしれないが，筆者の落語のときの笑いは，落語教授法をする以前の雑談等でみられた面白さに起因する笑いとは別の意味を感じるときがある。例えば，授業のなかで，「では，ここでちょっと落語を聞いてください」と言ったとき，ただそれだけで笑いが起こることがある。落語の物語のなかの笑いを狙った箇所では笑いが起きないこともしばしばあるが，一方で「あ，間違えた。もう1回」と言い直しをすることで笑いが起きることもある。これらの笑いは，教師なのに授業中に落語をするという落差に起因するもの，普段の授業や学校生活で見慣れた教師が緊張しながら落語をすることに対する応援としての笑いなどがあり，寄席等で一般的にみられる落語とは別のユーモアを含んでいたり，さらに自己開示の要素を含んでいたりもする。ユーモアを授業に取り入れることに関して，榊原ら(2004)は，笑いを教育に取り入れることで学習への内発的動機を引き起こしうると述べるとともに，教育における笑いやユーモアの重要性を述べているが，筆者も自身の体験を通して，このことを強く感じている。松原(2005)は授業中における教師自身に関する雑談には「信頼感の形成」に影響があると述べているが，授業者による落語の実演にも，それに類似する作用があると捉えている。そして，落語が終わると拍手が起こる。落語に拍手があるのは，寄席でも一般的にみられるが，筆者はこの拍手を授業者が落語に挑戦することに対する励ましの意味合いも込められていると理解している。そのことは，2015年のアンケートに「頑張ってください」という記述が頻繁に見られたり，登下校時の生徒とすれ違うときに「落語頑張ってください」「落語楽しみにしています」といった声をかけられたりするようになったことから推測できる。このように，落語教授法は「教えるもの—学習するもの」という教師と生徒との関係性に「応援されるもの—応援するもの」という新たな一面をもたせることにつながる。別のいい方をすると，それまでの教師から生徒への一方通行の関係性から，相互作用のある，つまりインタラクティブな関係性へと変わったということであり，落語中の笑いもそのような，新たな意味合いを含むものであると筆者は捉えている。

#### 2 授業中の姿勢が変わる

ここでいう姿勢には，具体的な座る体勢と授業に向かう気持ちの面での姿勢との両方がある。前者は，落語をする前には肘をついていたり，眠そうにうとうとしていたりした生徒が，落語をします，と言うと体を起こし授業者の方に体を向け，落語後もその姿勢のまま授業に取り組むという様子が見られるということだ。

また，後者の姿勢の変化とは，落語教授法を楽しみにする生徒が現れたということである。小田(2015)のアンケートの結果(表2)からも落語のある授業を楽しみにしている生徒の存在を読み取ることができる。高校生にとって授業や学習は決して楽しみな存在ではない。そのことは，台風や大雨で学校が臨時休校になると伝えたときの反応からもよく分かる。それにもかかわらず筆者の授業を楽しみにしている生徒が一定数いたということは，落語教授法の授業が一般的な授業とは一線を画すものとして受け止められていたということである。この「姿勢を変える」は，別の言い方をすると，前のめりに授業を受けるようになるということでもある。

ユーモアという点に言及するなら、それで生徒を惹きつけることに否定的な意見もあるが、教師が学習動機となるものを複数用意することは重要であると筆者は考えている。それというのは、教科の魅力、学ぶこと自体の楽しさや習慣化、進学・就職への必要性、教師の人間性に対する共感等、生徒が何を学習動機とするかは教師が求めたり制限をしたりするべきではなく、学習者自身が選びとるものであり、また学習の段階によっても学習動機は変化していくべきであると、指導教官との研究討議のなかで気づかされたからである。そして、教師のユーモアもその動機の1つとなっていていいはずである。学習を苦行のように捉えていた生徒が学習に楽しさを感じ、それがきっかけとなり、さらに別の学習動機を見つけるといように、ドミノ倒しのような学習動機づけの連鎖となる

表2 9月のアンケート結果 (小田, 2015)

大カテゴリー	カテゴリー	具体例	
1	理解を助ける	理解が深まる	その日の授業で習ったものと並列しているから、理解が深まるし/生物の内容を考えながら聞けるので、
		理解しやすくなる	分かりにくい部分を普段と生活と交えてあるから想像しやすくなる
2	覚えやすくなる・思い出しやすい	印象に残る	自習や今日のテストなどでも印象深く残っている
		覚えられる	生物に出てくる言葉を楽しく、そして簡単に覚えらえる、
		思い出しやすい	テストのときとかに落語を思い出したりすると内容が少し思い出せたりする、
		自主学習時に思い出せる	問題をやってたりしても、あ、教師が落語で言っていたなあとか思います。/復習するときなどに落語と関連付けて覚えられ
3		興味関心がわく	落語をしてくれることで、その事に関して関心がわく
		授業に意欲的に取り組める	落語を楽しみにするために生物の授業に意欲的に取り組むことができます、
		授業に対する意識が高まる	私だけでなく、みんなの生物の授業に対する意識が高まっていると思います。
4	次の授業が楽しみになる	次の授業が楽しみ	毎週楽しみにしています。/落語があるからこそ、生物が楽しみになります。
5	気分転換・リフレッシュ	気分転換・リフレッシュ	眠くても落語がはじまると目覚めます。
		休憩	少し疲れたときに休憩できてその後頑張れます。/息抜きになるいい感じですよ!
6	勉強のイメージを変える	授業が楽しくなる	授業が楽しく感じます。
		楽しみながら学べる	とても面白く生物の知識がつかます。
7	授業の雰囲気を変える	授業の雰囲気が変わる	授業全体が、明るく楽しくなったと感じました。
		クラスの雰囲気をを変える	クラス全体が集中していないという時の落語は効果抜群じゃないでしょうか。
		メリハリがつく	笑う時は笑って、問題を解くときは解いてなど、充実して
		難しいイメージを和らげる	生物の”難しい”というイメージを和らげて
8	落語が面白い	面白い	落語が面白いので
		落語が楽しい	落語を聞くのはとても楽しい
		落語が腑に落ちる	いつも「なるほど〜!」ってなります。
9	その他	その他	落語があると1週間頑張れます。/落語がすることによって一度落ち着いて考える事ができるので/難しい用語の事でも落語を聞いていると身近に感じた。

る可能性だってあるはずだ。大切なことは、1つ目の学習動機を見つけ、学ぶことの価値を大切に側立つことであり、落語教授法はそのような可能性を有した授業法であるといえる。

### 3 質問・相談に来る生徒の増加

落語教授法をするようになってから、多くの生徒が質問に来るようになった。それ以前は定期テスト前に数人来る程度であったが、今はテスト前の学習強化週間になると、毎日のように質問に来る生徒がいたり、テスト前でなくても授業後に分からない部分について質問を受ける機会が増えるようになった。以前は、質問をせずにわからない箇所を残したままテストを受け、低い得点をとっても気に留めない生徒が一定数いることに困惑もしたが、しかし現在、生徒から質問を頻繁に受けようになって生徒に対する見方が変わった。生徒は分からない箇所があると質問に来るのではな

い。分からない箇所があり、かつ質問をしやすい教師の存在があっはじめて質問をしに来るのである。このことは、先の学習動機とも連動している。つまり、以前の筆者は、今ほどは質問をしやすい教師ではなかったということであるし、学習動機もそれほど高められるような授業ではなかったということだ。これは、落語教授法を実践すると生徒が質問をするようになるという単純な話ではない。落語をしようと努力する姿、落語が上手くいかずに言い訳をしたり、冷や汗をかきながら下手なりに落語に取り組んだりする授業者の姿等、おおよそ教師の日常では見られないような姿を生徒に晒すことが自己開示に類似した、生徒との関係性の構築の一助となり、質問をしに来る生徒が増えるということもみられた。また、質問だけでなく、相談を受けることも増えた。部活動の先輩に対する不満や、家庭での不満、さらには異性の言動の真意についてどう考えたらいいか等、学習や学校とはあまり関係のないことの相談も受けるようになった。この現象を一言でいうなら、教師から生徒への一方的な情報伝達ではなく、インタラクティブな関係性の構築ができ始めているといえるのではないだろうか。そして、インタラクティブな関係性が構築されることで、質問や相談に来る生徒が増え、そのことは生徒の学びにより寄与できるようになるだけでなく、教師に新たな利益ももたらしている。それは、生徒が授業のどこで躓くかを知る機会となるということだ。質問を通してのやり取りは、生徒の躓きや誤解がどこで生じたかを理解することに繋がり、次の授業改善につながる。さらに、クラス内のちょっとした変化を生徒が話題にすることもあり、その情報をもとに、生徒の悩みが大きくなる前に話をすることができたりもする。このように、生徒からの質問・相談を促すインタラクティブな関係性の構築は、様々な利益を教師の授業改善やホームルーム運営にもたらすことにつながる可能性を有している。

#### 4 課題を提示された以上に丁寧に取り組む生徒の出現

ここでいう課題に丁寧に取り組むというのは、課題を「指示された通りに1回解いて答え合わせをして終わり」とするのではなく、間違えた問題を再度解き、さらに間違えた問題をもう一度解くというように何度も問題演習をしたり、指示された問題をすべて2回ずつ解いたり、自分なりに問題の要点を図や表にしてまとめたり、といった取り組みのことである。教科の魅力に惹かれ学習内容に興味をわき、課題に丁寧に取組む生徒がいることは想像に難くない。しかし、このケースは授業者とのインタラクティブな関係性がきっかけとなって、このように丁寧に課題に取り組む生徒の出現したと考えられるような事例である。これは、2015年度の1年生、および彼らが進級した2016年度の2年生に見られたが、彼らが単に課題を丁寧にやる集団ではないことは、他教科の授業者に確認済みである。

彼らにとって、課題は単に指示された通りに解いて期日までに提出すればいいというものではない。また、丁寧に取り組みたい、深く考えたい、という理由だけであるなら、それらを課題成果物として提出する必要はないのだが、わざわざそのようにしてくるから、授業者に彼ら自身の努力を示すことに何らかの意味を感じていると捉えることができ、ここにもインタラクティブな関係性の影響を感じとることができる。さらにいうと、これは落語教授法の頻度が少ない2016年度の1年生の夏季休業中の課題に対しては見られなかった。2016年度の1年生が夏季休業中までに落語教授法の実践が2回であったのに対して、2015年度は7回であり、2015年度入学生にだけ見られている、筆者の課題に対して特段丁寧に取り組む生徒がいるということである。落語教授法の頻度の影響なのかはまだ判断がつかないが、2015年度入学生に関していえば、インタラクティブな関係性の構築が学習動機につながり、具体的な行動として表出しているということである。夏季休業中の課題に丁寧に取り組んだ数名に対してインタビューを行ったところ、どの生徒も「生物が受験に必要だから」と答えていたが、その理由だけでは彼らの生物への取り組みと他の受験科目に対する取り

組みへの差に関して説明がつかない。学習しなければならない理由は誰しもが持っているが、それらの理由が具体的な行動につながるかはまた別問題である。

落語教授法によって授業に対する認識が、高校生の本分としてやらなければならないものから楽しみなものへと変わり、授業者とのインタラクティブな関係性の構築は質問・相談することへの抵抗感を減らし、学習そのものに対する充実感や、分かることの楽しさ、さらには進学校の生徒特有の受験のための学習の必要性などが相まって、このように丁寧に課題に取り組む生徒の出現に繋がったと筆者は考えている。2016年度入学生に関していえば、夏季課題に対してはそのような取り組みをした生徒はごく少数であったが、それでも筆者の担当する生物が得意科目と公言している生徒の出現がみられることから、彼らにも同様の変容が表れてくる可能性もある。

## 5 三者懇談での保護者との関係性構築の易化

2015年度は担任をもたなかったので、HR担任をしている2016年度にみられた変化である。B高校では、7月初旬に生徒、保護者と担任の三者で懇談を行っている。例年、筆者は保護者と比較的良好な関係性の構築ができていると自己分析をしているが、2016年度は今まで以上に和やかに懇談ができているという手応えがあった。懇談を通して学校や家庭での様子を話題にするなかで、学校への理解や日々の業務への感謝の言葉をいくつも聞いた。さらに、ある保護者から落語を見てみたいと言われたことから話が弾んだという場面もあった。改めて生徒は家庭で学校の様子などを話題にしている、そのなかで落語の話も話題に出ているようだと感じた。生徒が落語を楽しみにしているようであると保護者から言われるのは三者懇談時以外にも数回あった。三者懇談時に落語の話が出たのは、先に記した1件のみであったが保護者の学校に対する印象は、例年以上に肯定的であった。それは、家庭での会話において学校や授業者に肯定的な話題が多いからだと推測できる。落語教授法は、生徒とのインタラクティブな関係性の構築のみならず、その様子を聞いた保護者との関係性にまで好影響を及ぼしている。このことは、もし家庭で学校での悩みやトラブルが話題に出たときに保護者が学校に連絡を入れる際の抵抗感を少なくすることにつながり、授業改善が保護者対応にまで好影響を及ぼしていることを、さらにはトラブルに対する早期対応の可能性も示唆している。

## IV 総合考察

落語教授法をする授業者自身にも様々な変容が起きている。それは、落語を取り入れた授業をしようとして決意し、落語教授法を定義し、落語作りとそれを核とした授業案の作成に苦心し、そして落語教授法を実践してみて初めて気がついたことから省察をし、そしてまた次の落語教授法の授業案作成に苦心するというように断続的に授業者自身が落語教授法に関わりながら変容している。さらに、日々の実践を通しての気づきを本稿のように論文とする作業を通して多くの気づきがあり、変容がある。これらの変容自体が「Ⅲ 結果と考察」で書いたことに何らかの影響を及ぼしたり、影響を受けたりしている可能性もある。この「IV 総合考察」では、そのような活動を通して授業者自身に現れた変容を中心に考察する。

### 1 理想の授業像の変化

理想の授業のために教師に求められるのは、教科の専門知識をいかに多く有しているか、そして、それを身近な出来事と関連付けて伝えられるかだと、以前の私は認識していた。しかし今は、インタラクティブな関係性の構築も重視するようになってきている。「Ⅲ 結果と考察」に記したとお

り落語教授法実践後に様々な変容がみられたが、それらの変容を通して理想的な授業とは、このような変容がさらに強く表出したものではないかと考えるようになった。その鍵であるインタラクティブな関係性の構築のために重要なことの1つに、自己開示をすること、さらにいうと教師の弱い部分も含めて生徒の前に晒していくことがある。落語をするとき、うまく出来るか自信がないときもある。プロの落語家のように話せたならどんなにいいかと思うこともある。しかし、授業者自身が落語を実演することが重要なのであって、例えば「その落語を他者が実演する動画を見せる」では、このような変化が見られるとは到底思えない。授業者が目の前で努力する姿を見せること、そこに失敗や予想外の出来事からの笑いがあることが落語がインタラクティブな関係性の構築につながると捉えている。そして、インタラクティブな関係性の構築につながるものなら落語ではなくてもよいとも考えている。しかし、何かに挑戦する姿を見せる、ユーモアがある、失敗するときもある、こういった要素の多くを落語教授法は含んでおり、落語教授法の実践とその考察を通して、インタラクティブな関係性の構築の重要性に気づくことができた。

## 2 授業内容の再考と狙いの複数化

5分程度の落語を入れるためには、それ以前に実施していた授業を5分短縮すればよいという単純な話ではない。落語を入れるタイミングによって導入であったり、まとめてであったりする。落語そのものの目的は落語教授法ごと様々であるが、落語のストーリーを考えることと並行して、その落語が生きるような授業の展開も考えなければならない。落語の前に何を理解しておく必要があるか、落語後の授業の展開はどのようにするかなど、授業の構成を一から考え直している。板書による説明、動画による説明、グループ活動、ペア活動、ノートにまとめる、問題演習等はそれぞれが取り換え可能なものではなく、1時間の授業の中ですべてが有機的につながっているものであり、そこに新たに落語を取り入れるためには、授業を一から構成しなおすことが必要であり、この作業を通して授業内容がより洗練され、またそれとは別に気づいたこともある。それは授業の狙いのなかに「落語の効果を最大限にする」という別の狙いも加味されたということだ。

落語の前後の学習内容なしには落語の話を理解することは難しいのだが、一方で落語がなくてもその前後の授業展開で学習内容を理解することができる。これは落語教授法の特徴の1つである。落語のある授業をするときには、落語を理解するための知識を理解する、学習内容を思い出しながら落語を聞く、落語を聞きながら感じた不快感を事後説明で解消する、という展開が必要になる。別のいい方をすると、落語の効果の最大化を狙った展開も授業のなかに加味する必要があるということで、落語教授法の実践を通して授業のなかにその1時間の学習の狙いとは別の狙いを加味させることの意義に気づくことができた。

先に、学習動機を複数用意することが重要であると述べたが、同時に授業の狙いも複数あることが重要であると考えようになった。これは言われてみれば当たり前のことである。1時間の授業の狙い、単元の狙い、その教科の狙い、教師が授業を通して伝えたい価値観、受験を意識した狙い、その教科を専門に研究する生徒には伝えておきたい視点、そして落語の効果の最大化等、授業は複数の狙いが織物のように複雑に絡み合いつくりあげられる存在ではないだろうか。学習内容によっては、複雑な事象・原理の説明に長時間を要するものがある。その事象・原理を理解することがただ1つの目的であるなら、教師に求められる力量は「いかに簡潔に伝えられるか」のみであるが、しかしそこに落語があれば、落語の物語を理解するための前振りとも捉えることができる。科学者の苦勞に触れることで研究することの大切さを伝えることもできる。狙いが複数あることは、授業内容を豊かにできるということ、落語教授法の実践を通して気づくことができた。

### 3 カリキュラムにはない課題や試験の実施

B高校は文系を選択した生徒は2年次に生物の授業がないカリキュラムのために、3年間の学びを考えたときに、2年生の1年間で学習内容の忘却があるという状況があるのだが、それはカリキュラム上やむを得ないと捉えられていた。しかし、2016年度はその対策として、カリキュラムにはないが2年生の夏季休業中に生物の課題を課した。またその後の夏季休業明けに実施される試験でも生物を出題した。これは、現行のカリキュラムになってから初めての試みであり、筆者が現任校に赴任してから一度もみられなかった試みである。教師（筆者）にとっても余計な仕事ではあるが、3年生に進学したときのことを考えると生徒には利益が大きい取り組みである。生徒とのインタラクティブな関係性から、生徒の進路実現を後押ししたい気持ちを強くし、このような行動をしたのだと考えている。

### 4 落語教授法の可能性

保護者との良好な関係性が築ける。提示した以上に課題を丁寧に取り組む生徒がいる。生徒が様々なことを質問してくる。質問を通して生徒がどこで躓くかが分かる。生徒とのやり取りを通してクラス内の様子分かる。生徒との信頼関係がより深まる。授業がない2年生文系選択のために何かできることはないかと考えるようになる。理想の授業像が変わる。このように様々な変容が見られた。また、これによって生徒たちのなかには、その教科を深く学び、それが得意科目となるものが出てくるかもしれない。受験の得点源の1つとするものも現れるかもしれない。その教科についてより深く学びたいと、そのような進路を選択するかもしれない。クラスで何かあったときに早めに相談にくるかもしれない。クラスでのトラブルに際し担任に協力的な生徒がより多く現れるかもしれない。教師自身も授業やホームルーム経営のなかでより多くの充実感を得るかもしれない。このように、インタラクティブな関係性は、そこから次の変容につながる可能性も有している。

もちろん、教師のする落語に否定的な生徒もいる。小田（2014, 2015）には落語が始まると机に突っ伏す生徒の存在が記載されている。さらに、落語を自作する労力の大きさについてもそれらに記載されている通りである。学会等で発表すると、「筆者にはできるかもしれないが、誰にでも使える教材ではない」という意見も聞かれる。確かに、そのように受け止められるのも無理はない。しかし同時に、行き詰まりを感じる教師の打開策となりうるものでもないと筆者は考えている。本研究は、落語教授法の実践後にみられた変容とそれらについての考察を示すことで教師の働きかけを問い直す契機を提供できたと考える。

## V 参考文献

- 姫野完治. (2015). 教師の経験学習を構成する要因のモデル化. 日本教育工学会論文誌 39(3), 139-152.
- 上條晴夫. (2005). お笑いの世界に学ぶ教師の話術 子どもとのコミュニケーションの力を10倍高めるために. たんぽぽ出版.
- 松原志保. (2005). 教師による授業中の雑談がもつ教育的機能. 日本教育心理学会総会発表論文集 (47), 296.
- 小田雄仁. (2015). 落語を取り入れた授業の効果に関する一考察. 平成26年度山梨大学教職大学院教育実践研究報告書, 89-96.
- 小田雄仁. (2016). 落語を取り入れた授業の効果ーインタラクティブな関係性を目指した取り組みー. 平成27年度山梨大学教職大学院教育実践研究報告書, 9-19.

落語を取り入れた授業とその後に見られたインタラクティブな関係性の広がり

榑原禎宏ほか. (2004). 教室における笑いの可能性. 山梨大学教育人間科学部紀要, 6, 134-150.